

法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催

第６７回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

**祖母の姿に学ぶこと**

山形・北澤　謙志

　僕は困っている人がいたら、「大丈夫」と声をかけたり、優しく手を差し出したりできたらどんなに素敵なことだろう。

生活する全ての人が知人でも、知らない人であっても相手の笑顔や幸せを思って、ほんの少しの気遣いや優しさを持って生活できたら、世の中から争いごとや悲しい出来事が減り、おだやかで笑顔で過ごせる人が増えると思う。そう思えるようになったのは、僕の大好きな祖母の姿があったからだ。

僕の祖母は、四年前病院の看護部長を定年退職した。祖母よりも数年前に祖父が学校職員を定年退職していたが七十歳になる今も学校で働いている。すごいことだと思う。そんな祖父の姿もあったから、きっと祖母も何かの仕事には就くのだろうと何となく予想はしていたけど、まさか、たった一人で福島市飯坂町に一年間もボランティアに行くとは思ってもいなかった。祖母のこともすごいと思ったけど、一年間も家をはなれることを快く送り出した祖父の広い心にもぼくはおどろいた。

　祖母は四年前の三月三十一日に病院を退職し、翌日の四月一日から、東日本大震災で大変な思いを経験して来た町の方々がひなんする飯坂町の仮設住宅にボランティアとして行ったのだ。住民の方々と同じ仮設住宅で共に生活をし、一年を過ごしたのだ。

　祖母になぜボランティアをしに行くことを決めたのか聞いたところ、退職してからも看護師の資格を生かして、人の役に立つことはないかと考えていたそうだ。退職後の生活も、常に誰かのために何かをしたいと言う思いと姿は、看護師をしているときから変わっていなくて、祖母らしいと思った。

　仮設住宅では、看護師の資格を活かし、住民の健康チェックやイベントの手伝いをしたり、一緒にグラウンドゴルフをしたり、他から来るボランティアの人々のサポートをしたりしていた。一人一人の住宅を回って声をかけ共に生活をしながら、仮設に住む人達が元気に生活していけるようにサポートするのが仕事だった。

　飯坂町から僕の住む米沢は車で三十分。僕も時々祖母に会いに行き、泊まったりイベントにも一緒に参加したりして、住民の方々と仲良くさせてもらった。祖母にたった一人で一年間も家を離れて大変でなかったのか聞いた時も、僕や僕の兄弟が時々遊びに来てくれて元気をもらえたから一年間やって来れたと話してくれた。ただ遊びに行っているつもりが祖母の元気につながっていたことを知り、とてもうれしかった。

　ある時、どうして、辛いとか悲しいとか、マイナス思考にならないのか僕は不思議だった。僕だったら、自分がこれだけのことをしたら、同じ分だけ返してほしいと見返りを期待してしまうだろう。

兄弟三人で仮設に遊びに行き、祖母が席をはなれた時に、住民の方々が話してくれたことがある。

「祖母がこの仮設住宅に来てくれて本当に良かった。健康面も安心しているが、家に帰れなくて心が沈んでいる自分達を明るくしてくれた。どんな時も話を最後までうなずきながら聞いてくれることに感謝している。」

　この話を聞き、僕の胸は、ジーンとあつくなった。

　誰かの笑顔や幸せのために行動できるということは、本当にすごいことだと思う。祖母は口に出しては言わないけれど、「ありがとう」の言葉が祖母を動かす原動力にもなっているのだと思う。きっと祖母の中では全く特別なことではなく、ごく当たり前に相手のことを思いやったり優しく接することができるのだと思う。当たり前のことをごく普通にできるかと言ったら僕はまだまだである。

　皆が笑顔で、争いごとのない社会にするには、相手を思いやる優しさとほんの少しの気づかいが必要だと思う。その気づかいが自分をも笑顔にさせてくれるからだ。

　僕には、その手本になる人がすくそばにいてくれる。これからも、もっと祖母の姿に学びたい。

　そのためにも今はまず自分ができること。つまり笑顔で人と接し、誰にでも明るくからかわることからはじめたい。

「おはようございます。」

毎日の朝のあいさつ。これが僕の第一歩である。祖母に負けない笑顔今日も、僕は元気にあいさつをする。